

## 第6回 函館商業学校と地域商業の近代化

坂本紀子

<講座内容>

### はじめに

教育の歴史をみるということ

教育という窓をとおして地域社会、人びとの生き方を見つめ、教育の歴史を見直す。

### Ⅰ. 函館商業学校と近代的商人の養成

#### 1, 函館における近代的商業の模索

##### (1) 開港場から国内外の交易港へ

・安政元(1854)年に開港場となる ・1875(明治8)年に三菱商会在横浜・函館間の定期航路を開設

##### (2) 「函館四天王」他新興商人層の教育への関心

・「魁文社」の開業 ・「函館教育協会」への加入

##### (3) 「函館教育協会」<sup>1</sup>からの発信

・例会での演説 ・「北海道学事新報」の記事 (**資料1** 参照)

##### (4) 近代的商人養成の背景

・不況からの脱出 ・外国商人からの商権奪回(看貫料の全廃)

##### (5) 私立の商業学校の設置(奉公先から学校へ教育を依頼する歴史的契機)

・丁稚奉公(「子飼い」)から学校教育へ ・求められた教育内容(語学・数学・簿記)

#### 2, 庁立の函館商業学校の設置

##### (1) 商業学校設置を優先

・函館師範学校の校舎を利用 ・商人教育と商人層意識の改革 (**資料2** 参照)

##### (2) 函館商業学校の教育

・教育目的 (**資料3** 参照) ・履修科目と内容 (**表1** 参照)

・英語の重視と商業実践<sup>2</sup>

・「講談」の設置 ・商議員の設置 (**資料4** 参照)

・地域商業の変化 (**資料5** 参照)

##### (3) 卒業生と中途退学者

・卒業生の就職先 (**表2** 参照) ・中途退学者の実状

---

1 1881(明治14)年創設。教職関係者だけでなく、教育に関心のある「有志者」も加盟する会であるため、豪商層も会員として名前を連ねていた。

2 森有礼が招いたアメリカのホイットニーによって導入された。

## II. 函館商業学校の独立と近代産業部門への参入

### 1, 中学校の開校と函館商業学校

#### (1) 商業専修科

- ・ロシア語と中国語の加設
- ・商業専修科独立の気運
- ・函館商業会議所<sup>3</sup>の建議（資料6参照）

#### (2) 独立後の教育内容

- ・教育目的（資料7参照）
- ・履修科目と内容（表3参照）
- ・実習科目としての「行商」

#### (3) ウラジオストック商工業調査

- ・函館の商圈拡張
- ・「浦潮商工業調査」報告

### 2, 資本主義経済の進展と函館商業学校

#### (1) 函館の商業概況

- ・日露戦後の状況（株式、合資会社の増加、横浜・神戸と拮抗）
- ・第一次世界大戦の影響（サハリンへの商圈拡張、丸井今井百貨店営業）

#### (2) 函館商業学校卒業生の就職先

- ・卒業生の増加（グラフ参照）
- ・道内、および道外、海外への就職（資料8および表2参照）
- ・高等商業学校への進学（表2参照）

## むすびにかえて

- ・函館商業学校と地域社会の動的な相互関係性
- ・教育という窓からみた地域社会

---

3 函館商工会から函館商業会議所に改称。

## 第6回 函館商業学校と地域商業の近代化

坂本紀子

### 資料1

#### ○論説

商学ハ農学ト共に目下緊急ノ学ニシテ本港ノ如キ商業地ニ在テハ欠クベカラザルモノトス  
(略)

#### ○商学概論

世間往々商学上ニ就テロヲ開ク者ノ言ヲ開キ且又世人ガ一般ニ妄信スル所ノ説ニヨレバ凡ソ商業ナルモノハ素ヨリ学校ニテ教訓スル能ハザルモノニシテ人ノ若シ之ヲ習ハント欲セバ商家ニ入り親シク業ニ着キ実地習練スルニ若クハナカルベシト云ヘリ倩ラ此説ノ真疑ヲ考察スルニ誤ト正ト殆ド其半スル者ノ如シ蓋シ理論實際兼備セル諸学科ヲ一集シテ以テ商業専門ノ一校ヲ建テ以テ諸課ノ教員ヲシテ之ヲ教ヘシメ而此校ノ外ニ在テハ決シテ商業ヲ学習スルコト能ハスト云フカ如キ若クハ理実並ニ備ハルノ学法ハ未ダ此世ニ興ラズト考察スルカ如キハ大ニ誤レリ然レトモ手ニ実業ヲ執リテ実地ニ労働スルハ教科ノ不足ヲ補理スルニ足ルト思考スルカ如キハ是レ実ニ真理ニ適合セルモノナリ (略)

『北海道学事新報』第9号, 1882年2月11日

#### ○論説

##### ○商学概論 (前号商務局雑報抜粋ノ続キ)

商用の智識ハ学テ而テ得ベキモノタルコト已ニ判然ナレハ則チ左ニ商学ノ大要ヲ概記セントス

(略)

商事ヲ執行スルニ方リ時々筆算胸算等ヲ施為セザルヲ免レス故ニ算術ハ速ニ算シテ誤ナキ様習練スルヲ肝要トス之カ為ニ預メ日常至要ノ算法ニ熟練シ内外ノ尺度權衡貨制等ニ通曉シ能ク為替兩替等ノ算計ニ馴染シ能ク心ニ之ヲ理解スベシ

貿易商起業者大業ヲ簡理スル者及ヒ商家ノ下職ニ安セサルシヲ望ム所ノ手代等ハ皆ナ會計ノ任務ニ志スモノニ非サレトモ学理規模ニ適當シタル索引便利ノ記簿法ヲ理會シ手代ノ書入方ヲ合点シ (略)

『北海道学事新報』第10号, 1882年2月25日

### 資料2

(略) 今ま商業学校の無くて成らぬ所以ハ人々ノ已ニ熟ク知らるゝ処なれば事新らしく申すまでも無き筈なれども世間に尚往々商業ハ学校にて習ひ得らるゝものに非ざれば商業を学ばんにハ商家に入りて親しく実地に就て学ぶに及かずといふ偏見妄説を信じ学校ハ唯字を記き文を作るのみにて却つて商売の念慮を疎くするなどゝ心得居る輩もあり又或ハ商業学校ハ銀行会社の如き事業を企てんとするものか若くハ其の役員たらんと欲する者の為めにして尋常商家の子弟ニハ要なきものゝ如く誤解せる輩もありとか聞けり彼の旧幕時代未開のころハイザ知らず今日の文明世界に於てハ実に商業学校の必要欠く可らざる事ハ日一

日よりも切なると感するなり（略）

『函館新聞』1887年1月9日

（略）英語ノ適用広クシテ商業ニ必要ナルモ之ヲ能クスルモノ幾何カアル其他商事法規運輸保險会社法契約法等商業ニ必要ナルモ能ク之ヲ知ルモノアリヤ嗚呼世運日進ノ今日ニ当リ商業要衝ノ函館ニ於テ従来ノ陋習ニ安シ後進ノ子弟ヲ教育シ以テ適切ナル智識ヲ与ヘ完全ナル商人ヲ養成スルコトヲ務メス此ノ如クニシテ商權ヲ天下ニ争ハントスルハ豈危カラスヤ（略）

『函館新聞』1886年11月10日

### 資料3

函館商業学校規則

第一章 総則

第一条 本校ハ主トシテ商業ニ関スル实用必須ノ教育ヲ施シ躬ヲ善ク商業ヲ営ムベキモノヲ養成スル所トス

第二条 本校生徒ハ大約百名ヲ以テ定員トス

第三条 本校別ニ夜学生ヲ置ク其ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ

第二章

第一条 学科目ハ読書、習字、商用作文、数学、簿記、図画、理科、商品、地理、歴史、商業慣習、経済、英語学、商業実践、体操トス

第二条 各教科外ニ講談ノ一課ヲ置キ適宜ノ日時ニ於テ之ヲ施行ス

第三条 生徒ノ運動ヲ奨励スルタメ毎週若クハ臨時ニ適宜ノ日時ヲ選ビ各種ノ遊技ヲ演習セシム（略）

一、商用作文 作文ハカメテ着実ヲ主トシテ時々実地ニ抛リ考案作写セシム、故ニ實際適切必須ノ課題ヲ用フルハ論ナク亦生徒ヲシテ徒ニ之ヲ為サシムル事ナク専ラ其趣意方針ヲ实用ニ存シ其材料ノ如キハ一々事実ニ徴證セシメ務メテ浮華、忘誕虚構ノ弊ナカラシムベシ其文体ハ簡明流暢ニシテ渋難奇癖ノ病ナキヲ要ス（略）

一、商品 商品ハ天産及人造物ニ関シ内外各種商品ノ種類産地品質効用製法価格及需要ノ景況荷造り保存ノ方法変性物品ノ原因等ヲ教ヘ商品ノ見本アルモノハ之ヲ蒐集シテ現品ニ就キテ指教亦生徒ヲシテ実地商品ヲ鑑識品評セシム（略）

一、商業慣習 内外商業ノ慣習ヲ詳ニシ各業取引ノ順序方法若クハ口訳ヲ授ケ併テ各業ノ起源沿革ヲ教フ（略）

一、商業実践 商業実践ハ各業ノ実地営業取引ノ方法及通商貿易ノ状ヲ演習スルモノトス其方法実践場内ニ小売仲買卸売問屋及貿易廻漕鉄道保險ノ諸会社銀行税関郵便局電信局又ハ製造所及ビ市場等ヲ擬設シ通貨商品ハ模型又紙札ヲ以テ総ベテ営業取引ノ法ヲ実地ノ商務ニ模倣ス（略）

**表 1**

各学年授業時間（後期週時間）1886年

学年	1	2	3
科目			
読 書	4	3	0
習 字	3	2	0
商用作文	2	2	2
数 学	4	3	3
簿 記	0	3	3
図 画	2	0	0
理 科	0	0	2
商 品	0	2	0
地理歴史	2	2	0
商業慣習	0	2	0
経 済	0	3	3
英語学	8	7	6
商業実践	0	0	8
体 操	3	3	3

北海道庁立函館商業学校『創立四十年記念函館商業学校沿革史』（1885年）から作成。

**資料 4**

商議員規程

第一条 函館商業学校ニ商議員拾壹名ヲ置キ経験名望アル実業家ヲ選ヒ北海道庁長官之ヲ囑託ス

第二条 商議員ニ囑託スル事項左ノ如シ

- 一 校務一切ニ付学校長ノ諮問ニ応答スルコト
- 二 商事調査ニ付学校長ノ要求ニ応シ其方法ヲ協議分担スルコト
- 三 校務一切ニ付異見アル時ハ学校長ニ申告スルコト

第三条 商議員ハ毎月一回協議会ヲ開クモノトス

但シ此会ニ列席スル者ハ函館在勤書記官，区長及ヒ学校長ニ限ル  
最初の商議員に左ノ十一名に長官より委嘱があつた。

杉浦嘉七 渡邊熊四郎 常野正義 平田文右衛門 近藤彌兵衛 林宇三郎  
平出善三郎 伊藤鑄之助 遠藤吉平 小川幸平衛 田中正右衛門

北海道庁立函館商業学校『創立四十年記念函館商業学校沿革史』1885年

**資料 5**

当地の商店銀行会社の役員の四分の一は該卒業生を以て充たされ，上流の地位にあり，市内商店の如き之が為大抵新式の記帳法を実地に応用し大に旧風を一新せるものゝ如きは皆学校教育の興りて力ある所にして将来益々之が関係を親密融和ならしめんことを努めたり

**資料6**

(略) 我函館は日本の北半部に於ける唯一の外国貿易港にして全国市府の第九に位し北海全道及奥羽一帯の大境域に於ける内外貿易の中心市場たるのみならず亦た実に衆智の邁進文化の起点に具はるものなり従て此の地に実業学校殊に商業学校の設置を要するは更に多言を須みず是を以て明治十九年商業学校の設立あり継続十年の後則ち明治廿八年に至り之を廃せしも是当時中学を置き商業教育を其一科として併置し毫も支障なきの設備成りたるが為めにして(略) 名目に於ては中学と称し則ち中学教育を主とし商業教育を従としたるの看あるも(略) 中学設立の真意は実に商業教育の傍に中学教育を併せ施すに在り(略) 故に今回中学校令の改正により現立中学校に於て終に商業専修科を廃止せざる可からざるに至りたる以上は当然我函館に於て直に一の完全なる商業学校の設立あるべきことは本会議所の堅く信じて疑ざる所なり(略)

**資料7**

## 函館商業学校規則

第一条 本校ハ内外商業ニ係ル必須ノ教育ヲ施シ実地商務を經理スル者ヲ養成スル所トス(略)

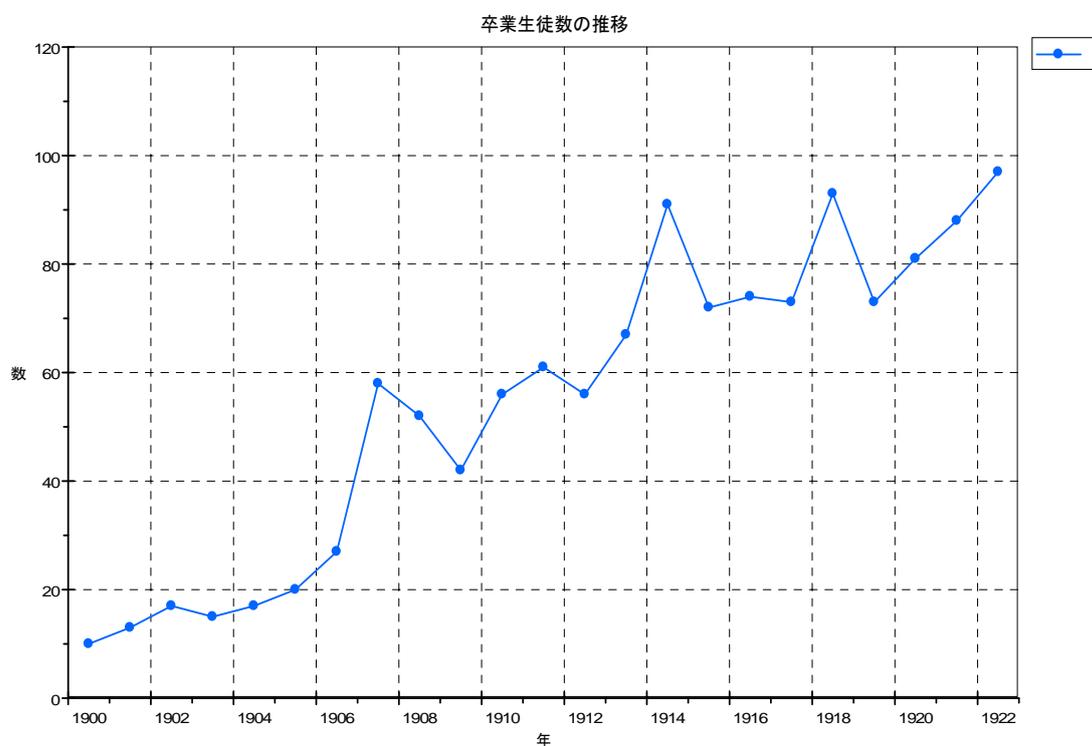
**表3**

各学年授業時数(週時間) 1899年

科目	予科		本科		
	1	2	1	2	3
修身	1	1	1	1	1
読書	3	3	2	1	1
作文	2	2	1	1	1
習字	2	2	1	1	1
数学	3	3	4	2	1
地理歴史	4	4	2	2	0
図画	1	1	0	0	0
理科	2	2	0	0	0
簿記	0	0	4	3	2
経済統計	0	0	0	2	3
商品	0	0	2	2	0
商事要項	0	0	0	3	0
商業実践	0	0	0	0	6
法規	0	0	0	2	3
英語	9	9	8	8	9
ロシア語	0	0	3	2	2
体操	3	3	3	3	3

『函商百年史』(函商百年史編集委員会, 1989年) から作成。

## グラフ



北海道庁立函館商業学校『創立四十年記念函館商業学校沿革史』（1885年）から作成

### 資料 8

此ノ函館ノ学校ヲ出タ生徒ナルモノハ最モ実業ニ対シテ活動シテ居リマス、近イ話ヲ申シマスレバ、札幌間ノ如キノ中等ノ商店若クハ銀行、会社アタリニ居ルノハ大概函館ノ学校ヲ出タ生徒デアル、此ノ学校カラ出タトスレバ直チニ間ニ合フ

『議案第一号調査委員会議事速記録第四号』1909年